

宮城県立がんセンター広報誌



# せりなべ

よりよく自分らしく  
生きてほしいから

宮人ハ語ル

緩和ケア内科 武田 郁央

おしえてせり爺！

緩和ケア病棟について

毎回がんセンターのスタッフに焦点を当てて、その人物に自身の思いを語ってもらおう。今回は、緩和ケア内科の武田郁央先生に語ってもらいます。

# みやびと かた 宮人ハ、語ル



いくお  
郁央

ただ  
武田

医師

## 学生時代

幼少期は小児喘息に苦しめられ、それを克服するため小学4年から中学まではサッカーで体を鍛えた。体が大きかったので、漫画キャプテン翼の高杉君（わかるかな？）のような存在だった。おかげで喘息にはならなくなりました。高校でもサッカーは水泳以外好きになりました。高校でもサッ



写真：サッカー部時代

カーを続けるつもりだったが、友人と先輩（黒おび）からの誘いで空手同好会を発足し部に昇格させる同志となった。折しも格闘技ブームで仲間も順調に増えてきたが、在学中に部として認められることはなかった。ただ、心身共に鍛えられた期間であり護身術は今でも健在である。進路に関しては最後まで悩んだ。当時は空を飛びたい、宇宙に行ってみたいと夢見る少年で、ロケット開発に携わりたいの思いもあったが、田舎で町医者をしていく親戚の影響で診療所を中心とした寄合所のようなコミュニティを作りたことへの思いの方が強く医学部に進学した。今思えば最初から臨床医、地域密着型の医師志望だったのだ。大学時代はバブル期で、「医者はゴルフができないと出世ができないぞ」と先輩にそのかされてゴルフ部に入部。プレーヤーとしては才能が開花しなかったが、キャディとしては天性のホスピタリティと状況判断能力が冴え大会ではキャプテンのキャディを務め上位に入賞、また、アルバイト（キャディ）でも社長さん達に可愛がられたのを覚えている。この頃から自分が輝くよりも誰かを輝かせる才能があったようだ。

## 外科医への道〜東北大学病院時代

卒業当初は整形外科医を目指していたが、水戸病院での研修期間中、骨よりも内臓への興味が強くなり外科医を志すようになった。当時としては珍しい高度救命救急センターを備えていた病院で、趣味は止血、特技は心臓マッサージといえるほどの激務の連続で医師としての根幹を徹底的に作り上げられた。歴代逃げ出す研修医もいた病院だが、幸いにも同時期に現筑波大学救急・集中治療医学教授の井上貴昭先生を筆頭に明るい仲間が集まっており、忙しくも楽しい日々を送ることができ感謝しかない。四年間の研修後の進路は悩みに悩んだが、結局指導医に憧れて東北大

学旧第二外科の門をたたいた。筑波大学出身者は初だった。また、専行が決まっていけない同期がほとんどだったが、自分は臓器移植をやりたいと決めており、移植・甲状腺班に入班宣言した。ここでは里見進教授の勲等を受け臓器移植、医の倫理、人命の尊さを改めて学び、そして人の上に立つものの資質というものをまざまざと見せつけられた。本当に魅力的な教授で皆が里見進のために仕事をしたいと思っていた。もっと貢献できればよかったが、あまりできない最後の弟子で誠に申し訳なく思う。大学では外科治療の傍らで高度救命救急センターにも在籍し、とにかく「患者を生かす」ことに全力を注いでいた。手術後の術後管理と称する合宿生活（病院で寝食を共にしていた）がとても思い出深い。

大学院の研究では移植免疫を解明したいとの思いで免疫学教室の菅村和夫教授（現宮城県立がんセンター発がん制御研究部特任部長、石井直人先生（現教授））に四年間お世話になり、当時としては最先端の調節性T細胞の研究に没頭した。人体がいかに絶妙なバランスの上に成り立っているかを再発見する機会となり、今でも常にバランスを考へて治療やケアを行うようにしている。人生において転機は何度か訪れるものだが、大学院卒業時にはアメリカの大学から基礎研究者としてオファーがあり、この時もかなり悩んだが結局臨床医、外科医として生きていくことを選択した。

## 緩和ケアとの出会い（平鹿総合病院時代）

外科医時代は「生きたい、死にたくない」との患者さんの思いに寄り添い、全力で治療に取り組んでいたが、その中でどうにも救えない「心の闇」にも触れてきた。対応・コミュニケーションの難しさを感じ模索している中で約十年前に緩和ケア（当時、在宅緩和ケアのフロントランナー

であった岡部医院岡部健先生の著書）と出会い、これだ！と思った。ちょうど秋田県の病院から応援依頼があった時期で、やるなら今だ！との思いで単身赴任した。こちらでは齋藤研院長、齋藤礼次郎先生にお願いして緩和ケアチームに加えていただきイロハからご指導いただいた。地域リソース不足から在宅診療にも参加したが、現場での対応には緩和ケアの知識が大いに生かされた。緩和ケアを実践していると、患者さんと共に歩む感覚が強くなり、充実感もあって次第にその魅力にとりつかれるようになった。持ち前のホスピタリティと緩和ケアの相性もよく、次第にこれが天職なのではと思うようになっていた。転帰は単身赴任四年目。自身の体調不良と父親の体調不良が重なったことをきっかけに、外科医を辞めて今後は緩和ケア医として生きていく決心をし、新たに東北大学緩和医療学教室の井上彰教授に師事した。

## 宮城県立がんセンターに入職して

東北大学緩和医療学教室で専門的な知識を深めた後、中保利通先生の後任でがんセンターに赴任した。がんセンターでの業務は想像以上に大変で、当たり前といえども当たり前なのだが病院にいる患者さんすべてが緩和ケアの対象者だった。できるだけ多くの患者さんの悩みを聞きたい、でも治療科の先生方の邪魔はしないようにとのスタンスで、自分は黒子（くろこ）と言いつつ聞かせて日々診療を続けている。体が大きくどうしても邪魔になりがち、威圧感が出てしまいがちなので、できるだけ小さくコンパクトに行動するように心がけている。がんセンターのスタッフは皆献身的、協力的で頭が下がる。このようなスタッフの協力・連携のおかげで緩和ケアチームや緩和ケア内科外来への紹介は増加傾向にあり、患者さん・ご家族のニーズに答えられるようになってきている。10月からは閉鎖されていた

## プロフィール

茨城県水戸市生まれ。筑波大学医学専門学群卒業。地元の国立水戸病院（現水戸医療センター）で研修後に東北大学旧第2外科（現総合外科）に入局。2014年に秋田県の平鹿総合病院外科に赴任し緩和ケアチームに参加。2018年に東北大学緩和医療学教室に再入局。緩和ケアを専門とし、2022年1月より現職。

緩和ケア病棟も再開されたので是非ご活用いただきたいと思う。

## 今後の展望

「緩和ケア」はチーム医療の最たるもので、広い受け皿(多職種を受け皿)で皆さんのニーズをキャッチし、適材適所で対応するシステムである。患者さんやご家族の方にはできるだけ不安や身体的苦痛が少なく治療を受けていただきたい、望みの場所で療養を続けて欲しいと思うので、気にかかるところがあればまずは近くのスタッフに声をかけていただきたい。それには基本的な緩和ケアを全てのスタッフが実践可能な状況にすることが先決であり、引き続き教育・指導に注力したいと思う。また、「緩和ケア」と聞くとネガティブなイメージをお持ちの方がまだまだ多いので、患者さん・ご家族に対しても啓発活動の継続が必要と感じて



写真：カンファレンスの様子

いる。時代は大きく変わり、我々の関わり方も以前とは様変わりしている。がんと診断された時点から、恐らくはそれ以前(病院に来る前)から悩みを抱えておられる患者さんも多いので、そのような胸の内をぜひお聞かせいただきたい。そして共に最善を考えていければと思う。

最後に自分の願望であるが、緩和ケアは実にベーシックなケアであり、すべての医療で利用可能である。医療に限らず我々の普段の生活にも応用できる。将来的には緩和ケアが当たり前すぎて挨拶するのと同じ感覚で実践されている、そのような社会であってほしいと思う。



薬剤師  
浅野 二未也 さん

患者さんの考えや気持ちをじっくり傾聴。緩和ケアにおける「お手本」のような丁寧な対応で不安や苦痛を取り除くのが武田先生です。患者さんやご家族、医療スタッフからも信頼される当院の緩和ケアにとって大きな柱のような存在です。

我々スタッフへも優しく、様々なことを教えて下さるので緩和ケアチームの一員として働きやすさを感じております。回診に同行する中で、患者さんへの接し方や緩和ケアにおける考え方など教わる機会が多くあり、薬剤師としてのスキルアップに繋がられています。これからも緩和ケアを盛り上げていきましょう！



看護師  
早坂 利恵 さん

がんセンターに武田先生が赴任されて2年半。先生とは主に緩和ケアチームや緩和ケア内科外来にて働かせて頂いています。先生は多忙な時、お疲れの時、どんな時も「それは大変ですね！」と迅速かつ丁寧に対応されます。これは患者さん・ご家族はもちろんのこと、わたしたち医療スタッフにとってもとても心強いものです。その中でもわたしが尊敬するのは、どの方にも真摯に向き合われること。関わりきる覚悟を持たれているところです。「凄いな…」と感じています。一方、この原稿を書きながら、そういえばお仕事以外の先生のことはあまり知らないことに気づきました。

せりなべ今月号を読み、全貌を把握できるのを楽しみにしています！



精神腫瘍科  
山下 元康



## せん妄という用語について

古代ローマのケルサスは「医学論」で、がんを Cancer (ラテン語で蟹の意) と記載しましたが、彼は高熱や頭部外傷時の精神障害をせん妄 Delirium (暈や暈から外れるという意) と命名したことで知られています。せん妄は高齢の進行がん患者さんの約40%、旅立ち前には約80%の方が体験するといわれています。

せん妄は、脳自体の障害、または、心臓、肺、肝臓、腎臓などの臓器障害や全身感染症、手術、薬物が脳に影響を与えて生じた急性脳不全の病態の一つです。せん妄という急性脳不全の本態は軽度から中等度の意識の曇りを示す急性脳機能障害であり、睡眠覚醒のリズムが乱れて認知機能が障害されます。そこから生じる精神行動面の変化は多彩で、情動不安定、易興奮性や意欲低下、言動や行動のまとまりのなき、幻覚妄想体験が多いで

すが、特異的な精神症状はなく、他の精神障害と誤解され易いです。同様の概念に、もうろう状態、アメンチア、夢幻様状態、ICU症候群(精神病)、急性錯乱状態、混乱、急性脳症、急性脳症候群、急性脳機能障害、精神状態の変調(altered mental status) など多数の用語があることも誤解と混乱を招いているようです。

せん妄(譫妄)という日本語は中国由来で、うわ言や戯言をとりとめもなく喋るといふ「譫」と、出鱈目で理に合わない振舞いという「妄」を表しており、せん妄特異的な病態を示していないので内容的にも適切さを欠きます。超高齢化社会のピークに向けて慢性脳機能障害であるせん妄の増加も不可避であり、一般の認知が高まれば、認知症(痴呆から名称変更)のように、せん妄の呼称変更が将来的には望ましいと思われま

## 地域の緩和ケアのセンターとして



緩和ケア内科  
佐竹 宣明



近頃、緩和ケア分野で興味深い内容の論文が発表されました。日本国内の進行がん患者の生存期間が療養場所、すなわち在宅医療と緩和ケア病棟との差があるかどうかを調査、分析したものです。皆さんはどのような結果になったと思われますか。結論を先にいうと、2つの療養場所による生存期間にはそれほど大きな違いがみられませんでした。

総合病院であれば各診療科がそろい、24時間の看護体制を有し、検査設備が充実、そのような医療資源を有する病院での入院には在宅医療にはないメリットがあります。入院している方やご家族の安心感も大きなものがあります。緩和ケア病棟にも同じことが言えます。一方、在宅医療はどうでしょう。体調が変化したときの対応への不

安や介護疲労の問題はありますが、自宅ならではの良さはいくつもありません。住み慣れた家で、家族と一緒に、これまでの生活スタイルに近い形で自分らしく過ごす。それらはいくら病院が大きく、高度機能を持っていても提供困難なものです。

さて、本年10月から再開した我々の緩和ケア病棟は豊かな自然に囲まれて、心落ち着く素晴らしい環境にあると自負しています。在宅医療が何らかの理由で困難となった患者さんの療養場所として必要時に利用していただき、再び自宅へ戻ることも目指せる双方向の機能を持った、地域の緩和ケアのセンターの役目を発揮していきたいと思っています。

## ドクターは伝えたい『がん』のこと



おしえて  
せり爺!

# 緩和ケア病棟について

## 緩和ケア病棟の概要

がんセンター緩和ケア病棟は、2002年5月にオープンし、今年で21年になります。2021年2月～2023年9月までコロナ病棟として運用していましたが、この10月から再開しています。緩和内科医師3名、看護師18名（緩和ケア認定看護師含む）、精神腫瘍科医師、薬剤師、栄養士、臨床心理士、理学療法士、退院調整看護師でチーム医療を行っています。

病室のタイプは3通りあり、特別個室（有料）12室、一般個室（無料）5室と2床室（無料）4室で構成されています。



特別個室（有料）



一般個室（無料）



2床室（無料）

## 緩和ケア病棟の推しポイント

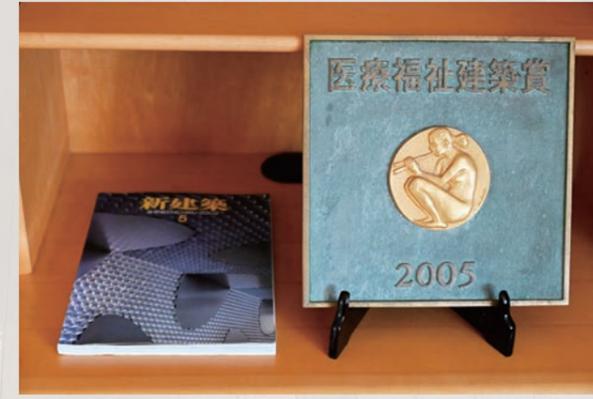
**①自然豊かで静かな環境と、木の温もりを感じる病室**  
 中庭を囲むように病室が配置されています。中庭には大きな桜の木、藤棚、季節の草花、隣接する山の木も借景となり、患者さんやご家族、そして私たちスタッフも癒されています。寒い時期になりましたが、天候をみながら外気浴もおこなえます。病室は木を基調としコンクリートと木の調和が感じられる建物になっています。暖色系の明かりで、家庭的な雰囲気になっています。患者さんご家族が自宅にいるような気持ちで過ごしていただきたい。というコンセプトとなっております。この病棟は2005年の医療福祉建築賞を受賞しています。

**②患者さんを支える医療スタッフ**  
 2年9か月コロナ病棟として運用してきました。緩和ケアから離れた時間があり、自分たちの緩和ケアを考える機会になりました。患者さんや、ご家族が、どんな風に過ごしたいか、その思いを共有し、お手伝いさせていただきます。

## 地域の皆さまと連携

緩和ケア病棟には、在宅で過ごされていた患者さんが利用できる病室があります。利用するための要件がありますので、がんセンターのホームページをご覧ください。

がんセンター  
ホームページは  
こちらから



# みやとも 宮友ト語ル 医療法人社団 やまと やまと在宅診療所 名取



なかほ としみち  
院長 中保 利通

富山県高岡市出身、金沢大学医学部卒業、医学博士。日本赤十字社医療センター、耳原総合病院、仙台市立病院、東北大学病院（緩和医療学分野）、宮城県立がんセンター（2015/6-2022/3）等で勤務。定年退職後2022年4月より医療法人社団 やまと在宅診療所常勤医（登米・仙台あゆみ）。同年9月より現職。

## クリニックの紹介

当院では病気を抱えていても安心して過ごしていただくために、訪問診療というスタイルで地域の方々に適切な医療とそれに関連する情報を随時提供しています。糖尿病、高血圧など比較的よくみられる病気から、脳卒中後遺症やいわゆる難病に至るまで、様々な疾患に関する相談及び健康管理・服薬支援を行っています。また、紹介病院やがん診療連携拠点病院との連携を保ちながら、がん等に伴う苦痛の軽減に努めています。

診療所スタッフは医師3名（うち2名は非常勤の応援医）、看護師2名、事務及び診療アシスタント6名という構成です。母体の医療法人社団やまとは登米市に本拠

地を置き、現在宮城・岩手・神奈川・高知の4県内に合計10カ所の診療所を持っています。離れていてもリアルタイムで患者情報を把握したり、スタッフ間の情報連携、処方箋や紹介状作成などをすべてタブレット端末上で操作できる仕組みができていくだけでなく、「診療アシスタント」というポジションを設け、医師が診療に専念できるようにサポートする体制を構築しています。

2022年9月に診療所を開設してからの1年2か月で293名の方々の診療に携わってきました。入院中の方も含め現在診療中の方は119名、すでに他界された方々は157名です。特養や有料老人ホームへの入所やがん治療を希望されるなどの理由により中止・解約とされた方が17名でした。



訪問診療を進めるにあたり、お住まいの地域近辺の訪問看護ステーションや調剤薬局、居宅介護支援事業所などと連携・協働することが大変重要になります。そうすることによって、患者さんの状態変化をより早く、よりきめ細やかにキャッチすることが可能となり、ひいてはQOL低下を少しでも食い止めることに繋がります。これまで5名以上の患者さんを共にご担当いただいた実績のある訪問ステーションは15カ所、調剤

薬局は11カ所、居宅介護支援事業所は19カ所となっております。その連携をより密なものにするために Medical Care Station (MCS) という完全非公開型医療介護専用SNSが情報交換に大変役立っています。連携を重ねるごとに顔の見える関係ができてくることを実感しています。

## がんセンターに期待すること

今後がんセンターに期待することとしては、超高齢社会が目前に迫っている中、がんという病を抱えた高齢者も当然増えますので、病院と在宅医療の現場とが電話・書面だけでなく、テレヘルス技術を導入するなどして連絡がとりやすくなってほしいと考えています。例えば、がんセンター緩和ケア病棟への入棟申込が済んでいる患者さんにせん妄、呼吸苦、脊髄切迫麻痺など在宅診療では治療困難な症状が生じた際に、ご自宅での様子を遠隔通信でご覧頂くことで、少しでも早く入院の必要性をお伝えできるようになるでしょう。住み慣れた自宅ですつと生活・療養したいと願う患者さん・ご家族の皆さんの中には、どうしても苦しい時には病院へ、と思っておられる方も実は少なくありません。そのような方々にとっては、きっと大きな安心につながると思います。

## 診療時間

	月	火	水	木	金	土	日
9:00 ~ 12:00	○	○	○	○	○	/	/
13:00 ~ 18:00	○	○	○	○	○	/	/

※緊急時 24時間 365日対応。

## 基本情報

- 【休診日】土曜・日曜・祝祭日・年末年始（12/29～1/3）
- 【診療受付時間】9:00～12:00 / 13:00～18:00
- 【電話番号】022-397-6313
- 【住所】〒981-1232 宮城県名取市大手町1丁目1番地22 NNハイツ1号室
- 【診療科】内科、外科、緩和ケア内科、訪問診療

公式HP



当センター職員の可愛い家族を紹介します！



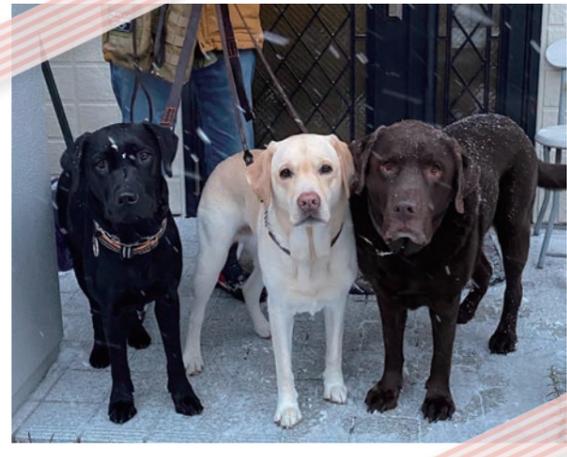
## My Family

看護部 部長

佐藤 千賀



茶太郎くん・花ちゃん・小次郎くん



我が家の毛深い大切な家族、ラブラドルレトリバーの茶太郎（12歳）、花（9歳）、小次郎（5歳）、3頭合わせて100Kgです！食べるの大好き！ダイソン並みの吸引力で、我が家のわんわんエンゲル係数は馬鹿になりません。決して人の言葉は話さないけど、嬉しい時も悲しい時も、どんな時も寄り添ってくれる3頭は大切な My family です。

## 知ってる？/ 緩和ケア認定 看護師のオハナシ



## 緩和ケア認定看護師について

わたしたち緩和ケア認定看護師は、医療チームの一員として、治療の時期や入院・外来を問わず、患者さんとご家族が抱える苦悩を和らげるケアを提供し、生活や人生をサポートしています。現在、それぞれが呼吸器科・消化器科・緩和ケア病棟に配属され、緩和ケアを実践しながらスタッフに対して教育支援を行っています。一般病棟では、病の早い時期から化学療法や放射線療法などの治療と組み合わせるよう、緩和ケア病棟では、死を自然な過程と捉え、患者さんがご家族と共に自分らしく生きられるように、緩和ケアを提供しています。また、ひとり月2回、

看護外来を担当しています。依頼を受けた患者さんにご家族に対して、通院治療・在宅療養中の不安や困り事の相談に乗り、問題や課題の解決に向けた支援を行っています。

緩和ケアは終末期のケアと思われがちですが、それだけではありません。私たちは、どんな場面でも、患者さんやご家族のご希望やご意向を大切にするという信念を持って活動しています。

また、地域の医療機関や訪問看護ステーション、介護福祉施設などからご依頼があれば、出前講座に出かけ緩和ケアを普及しています。是非ご活用ください。

### せりなべ7号 編集後記

文 海法 道子

光が差し込むガラス張りの白い渡り廊下を通り抜けドアを開けると、一段暖かい照明に照らされた木の廊下が広がっている。病院独特の匂いとは異なる、自然で家の中にあるような少し温かみのある空気が漂う。広い中庭を取り囲む廊下を歩き進めるとそれぞれの病室やご家族が休むスペースや談話室などがゆったりとした間隔で並んでいる。それぞれの部屋から臨む景色は異なり、中庭に面した部屋や外側の雑木林に面した部屋、どの部屋からも外の気配が近く感じられる。

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、長期間使用することができなかった緩和ケア病棟が2023年秋に再稼働した。緩和ケア病床はがんを診療する病院にとってなくてはならない場所であり、必要とする患者さんだけではなく我々医療スタッフも待ち望んでいた。

当院の緩和ケア内科は佐竹宜明先生、武田郁央先生、清川裕道先生の3名で担当されており、全科の症状緩和・苦痛予防・療養中のQOL向上を図るために日々奔走されている。今回宮人・武田先生はいつも柔らかな物腰で患者さんや医療スタッフの訴えに耳を傾け、「それは大変ですね、どうしましょう。」と言いながらその時その時で適切な指示やアドバイスを下さる。できない、無理だ、などというお返事は頂いたことがない。難治性のがんに対する治療の限界がきても、身体の苦痛や精神的な苦痛を和らげる手立てには限界はないですよ、と言ってくださっているように思う。

○せりなべの料理人

編集委員長：海法道子 副委員長：猪岡京子、小山洋

編集委員：鎌田真弓、渡邊香奈、明門真吾、佐藤美和、佐々木めぐみ、吉野敦、小野暢子、後藤夕子、高橋央、齋藤星河、野村結花

写真・構成：広報担当



# 広報カメラが切り取る がんセンターの日常 みやふおと

撮影 広報担当



## みやがん広報室からのお知らせ

### ●がん情報ラジオのお知らせ

当センターでは、がんセンターのスタッフががんに関する話題を紹介していくラジオ番組「がん情報ラジオ」をエフエムなとりにて放送しています。放送時間は、毎週金曜日夕方5時30分から5時44分、翌日土曜日の午前9時16分から9時29分に再放送も行ってまいります。



### ●ご意見・ご感想の募集

広報誌「せりなべ」に関するご意見・ご感想を募集しております。下記のフォームから皆さまの声をお寄せください。

投稿フォーム



### ●SNS アカウントを開設しました



ぜひご登録ください。

みやがん広報室

検索

宮城県立がんセンター広報誌  
せりなべ 冬号

本紙はホームページからもご覧いただけます。

2024年1月1日発行 vol.7



〒981-1293 宮城県名取市愛島塩手字野田山47-1

<https://www.miyagi-pho.jp/mcc/>

【広報誌に関するお問合せ】 ☎ 022-384-3151 (代)

